西ヨーロッパ文化圏のボーダーランド
—東ヨーロッパの民族と国家—

野　崎　清　孝*

The borderlands of Western Civilization:
Ethnic groups and nations in Eastern Europe.

Kiyotaka NOZAKI

I　はしがき

1989年は、東ヨーロッパ変革の年であった。社会主義体制の中での改革をはかる国、社会主義体制から民主主義体制への転換をめざす国と様々であったが、いずれにしてもこれらの動きを連ねて歴史上まれにみる画期をもたらした。その嵐は、雪崩現象にも似て、急激でまたたく間に東ヨーロッパ全域を席捲した。その年の8月下旬までは1980年に結成された「連帯」を中心として改革が進められていたポーランドや1988年以来、複数政党制を導入するなど自由化の道を進んでいたハンガリーを除いて表面上は平静で、その時点ではその後に起こる事態を何人も予想することはできなかった。

5月以来、その前兆があったが、8月19日、突如としてハンガリーとオーストリアの国境障壁が、ノイジードル湖近くのオーストリア領メルビッシュ付近で解放され、東ドイツから西ドイツへの人口流出が急増した。脱出の可能性のあるハンガリーに入国して「鉄のカーテン」のさけ目を求めて待機していた東ドイツの人々はその場所を得て、集団越境に成功した。この時期、チェコスロバキアやポーランドからの流出を合わせてその数225,000人に達した。その後、ハンガリーの憲法改正＝国名改正、政党活動法、自由選挙（10月18日）、東ドイツのホーネッカー国家評議会議長の退陣（10月18日）、1961年に構築されたベルリンの壁の崩壊（11月9日）、ブルガリアのジフコフ共産党書記長の辞任（11月10日）、チェコスロバキアのヤケシュ書記長の退陣（11月24日）、同じくフサーク大統領の辞任（12月10日）と続き、12月22日にはドラマティックなルーマニアのチャウシェスク政権の崩壊によって、根底から東ヨーロッパの体制が塗り替えられた。

第二次世界大戦後、社会主義体制のもとで鎖国政策を取り続けてきたアルバニアにおいても、他の東ヨーロッパ諸国に一周り遅れて1990年5月以来、解放政策がとられ始めた。しかしながら不十分な民主化に反発するアルバニア人は、西ヨーロッパ諸国の大使館に駆け込んでイタリア、フランス、ドイツ、ギリシアなどに出国するといった騒ぎがあった。その後も1991年にかけて多くの経済難民がイタリアに入国を続けており、イタリア政府はその対応に苦慮している。そうした中にも最後まで取り残されていたアルバニアを加えて35国が、1991年6月19日、全ヨー

平成3年9月30日受理　*文学部地理学研究室

ロッパ安全協力会議（CSCE）を開いた。

以上の一連の改革がなぜこの期に起こったかについては種々の見方があるが、正確に明らかにされるのは後世の歴史家によってであろう。その中で少なくとも1985年に始まるゴルバチョフのペレストロイカがその下地にあったことだけはたしかである。

ペレストロイカはもろ刃のやいばとなって、ソ連邦内の共和国は相次いで自治、独立を求める運動を展開し始めた。とくにソ連邦の西部に限定すれば、バルト三国のエストニア、ラトビア、リトアニアは、いずれも1918年に達成した独立を、1939年の独ソ不可侵条約の中の秘密議定書によって喪失したことに強い不満をいだいていた。1989年８月、分離独立をめざす運動が起こり、23日の夜にはエストニアの首都タリンからラトビアを経てリトアニアの首都ビリニュスまで、延々620kmにわたってバルトの道と名付けられる約60万人の「人間の鎖」がつくられた。この日は、秘密議定書が調印されてからちょうど50年目にあたっていた。1990年３月11日にはリトアニア、同じく30日にはエストニア、５月４日にはラトビアがそれぞれ独立を宣言し、ソ連邦からの離脱を鮮明にした。さらに５月12日にはバルト三国首脳会議を開き、結束を固めるところがあった。三国のソ連邦政府に対する対応策には違いがあったが、ソ連邦政府は、「連邦離脱法」を制定してこれを牽制するとともに、とくにリトアニアに対しては経済制裁を発動し、他の二国に対しても独立宣言の撤回を迫ったりした。1991年１月、世界の目が湾岸戦争に注がれているさなか、連邦政府はリトアニア、ラトビアに武力行使の挙に出たが、このことは国際的に非難を強めた。

８月に起こったソ連邦のクーデター失敗、共産主義体制の崩壊は、バルト三国の独立を加速化させた。ソ連邦が独立容認の姿勢を打ち出したこともあって、ヨーロッパ共同体（EC）加盟各国を中心に、独立承認に踏み切る国が相次ぎ、悲願であるバルト三国の独立はにわかに現実となった（1991年９月６日）。バルト三国においてそれぞれの主要民族人口の全人口に対する比率は、1959年にはエストニア73％、ラトビア62％、リトアニア79％であったが、ロシア人やウクライナ人の東スラブの非主要民族が次第に増加し、とくにラトビアでは今日50％を割る状況ともいわれ、独立後も問題を残す懸念がある[1]。このほかバルト三国はいずれもその他の少数民族をかかえていることである。例えばリトアニアではビリニュスの南、シャリチナンカイの住民は81％までがポーランド人であってリトアニアの分離独立には消極的で、むしろポーランドへの帰属を望んでいた。さらに重要なことは今後、国家単位の経済をいかに確立していくかの課題がある。

モルドバ（1990年５月モルダビアを改称）では「言語法」を制定して、公用語使用文字をキリル文字からラテン文字に改めた。モルドバのうち、ドニエストル川左岸を除いて大部分はベッサラビアと呼ばれ、1940年以前はルーマニア領で、ここには多くのルーマニア系のモルドバ人が居住している。モルドバとルーマニアの国境線が一時的であるにしても開放されたのは、1990年５月６日のことである。このモルドバをはじめウクライナでも西ウクライナ地方を中心に自治、独立の動きがあり、これに刺激されて白ロシア（ベラルーシ）にも同調の動きがある。1991年８月29日、ロシア共和国とウクライナ共和国が暫定的な軍事・経済同盟を結成することで合意し、連邦維持をはかる方向を確認したが、その後の状勢変化は予断を許さない。

民族問題をめぐって慢性的に不穏な状況が続いていたユーゴスラビアでは、1991年５月になって遂に内戦状態に陥り、６月にはスロベニアとクロアチアは連邦からの分離独立を宣言した。体制の中での改革がすでにおり込みずみと考えられていた多民族国家ユーゴスラビア国内の民族問題は、次の対立構図のあらわれとも受け取れる難題である。主導権を握るセルビア共和国の政治姿勢の背景には、伝統的な大セルビア主義が根強いことをうかがわせる。８月セルビア

（連邦）とクロアチアとの間に調停に入ったヨーロッパ共同体（EC）の仲介が今後どのように進展するか、現地の状況にはきわめて厳しいものがあり、ユーゴスラビアは解体の方向をたどるのではないかと懸念される。

1990年6月、文部省はこのように急激な東ヨーロッパの変革に対応して1991年度から使用する高等学校社会科の教科書に、正誤訂正の範囲を拡大してこれを認めることとした。「現代社会」と「政治・経済」がとくに対象になるようであるが、「地理」、「世界史」も深い関係があると考えられる。さらに1991年8月以後のソ連邦情勢の変化はなお流動的で、今後事態の進みを見ていく必要があろう。本稿は、このような変革の舞台となった東ヨーロッパを、西ヨーロッパ文化圏のボーダーランドと位置づけ、その時代的経緯を地理的に考えてみたい。そのためにまず西ヨーロッパ文化圏の地理的圏域、さらに西ヨーロッパ文化の特色をとりあげ、その東漸の過程を明らかにしたい。いっぽう東ヨーロッパの圏域、東ヨーロッパの地域的特色をとりあげ、今日的問題との関係に及びたい。そこではとくにソ連邦を含めて民族と国家の関係から民族とは何かを思考しつつ、これに対して国家が歴史を通じて、いかなる役割を果してきたかを考えることにしたい。

東ヨーロッパの民族分布は、きわめて複雑であるから民族と国家を一致させ、民族単位の国家をつくりあげることは到底不可能である。その中で政治的に民族が、国家の枠組みによって分断され、その結果散在する少数グループが、特定の国家の中において少数民族となり、不当な扱いを受けることなどによって問題が生じた。人類の叡知は、少数民族の生活、文化そして感情を相互に理解し、尊重し合うことを可能にするはずである。そうした配慮は東ヨーロッパではまだようやくその緒についたばかりであるといえる。多数民族は少数民族の立場を正しく理解するとともにすべての国家が、きめの細かい対民族政策を進める必要がある。

II　西ヨーロッパ文化の特色

1991年も主要先進国首脳会議（サミット）がロンドンで開催された。7国のうち日本、アメリカ合衆国、カナダを除くイギリス、フランス、ドイツ、イタリアの4国は西ヨーロッパに属する。第二次世界大戦後、植民地支配を放棄して西ヨーロッパはかつての栄光と繁栄を失い、次第に矮小化したといわれる。しかしそれでも依然として世界のなかで重要な役割を担っていることはたしかである。1989年の一人当たりの国民総生産（GNP USドル）をみると、イギリス、14570（18位）、フランス17830（12位）、（西）ドイツ20750（8位）、イタリヤ15150（17位）のほか、スイス（1位）、オーストリア（13位）、ベルギー（14位）、オランダ（16位）など、すべての国が上位を占めている。西ヨーロッパのそれぞれの国は、過去のストック財を生かし、国民的叡知を傾けて政治的、経済的安定をはかってきた成果である。

西ヨーロッパ文化の基本的特性とは何かの問いに対して大方の答えは、古典文化の伝統、キリスト教、ゲルマン民族の精神さらに啓蒙思想と合理主義、産業革命と技術革新、自由主義と民主主義の定着などとなってかえってくる。西ヨーロッパは自然的にも、人文的にも穏やかで豊かで調和のとれた地域である。和辻哲郎は、「西欧の風土が牧場的であることは、それが湿潤と乾燥との総合、夏の乾燥というごとき点において地中海沿岸と共通である」と延べ、西ヨーロッパの風土は、地中海沿岸より日照が少なく、冬の気温が低く、たしかにきびしいには違いないが、それでも「西欧の自然は南欧のそれよりも一層従順なのである」と西ヨーロッパの風土を特色づけている。さらにイタリアこそがヨーロッパの発祥地で、ここに出現した牧場がアルプス山脈以北の西ヨーロッパに入って森林や沼沢を開拓しての牧場の出現につながったと述べている[2)]。

しかし地中海沿岸と西ヨーロッパの風土の違いをゲーテ（『イタリア紀行』）ならずとも認めないわけにはいかない。P．ヴィーダル・ド・ラ・ブラーシュは、建築材料をとりあげた中で地中海沿岸地域では「太陽のきらめきと時間の経過による古色とが、ギリシア或はイタリアの大理石や、或は激しい色のローマ．カムパニヤの淡水の灰華を想ひ起させる」と述べ、西ヨーロッパ地域では「落葉樹の諸々の種が生んだ所の多数の応用の中で―家具、農具、車製造、笊等―建造物に於ける骨組財としての役割を第一位に考えねばならぬ」と比較している[3]。さらに加えて18世紀の西ヨーロッパの飛躍を決定的にしたものは産業革命である。イギリスに始まり、西ヨーロッパに広がった背景は、鉄鋼や石炭の埋蔵が豊富なことであった。これを基盤として経済、政治全般の発展、拡充をもたらし、資本主義の確立などによって世界をリードすることになった。

T．Gジョーダン[4]は、ヨーロッパを定義づけるのにつぎの10の具体的な指標をあげている。1　教育のゆき届いた住民　2　健康的な住民　3　栄養のよい住民　4　世界の平均よりはるかに低い出生率と死亡率　5　世界の平均よりはるかに高い一人当たり年平均所得　6　卓越する年人口　7　工業指向の経済　8　市場指向の農業　9　すぐれた交通体系　10　自由に選挙される安定した政府　である。さらに彼は指標を使ってヨーロッパを四つの地域に区分して西ヨーロッパ、東ヨーロッパ、南ヨーロッパ、北ヨーロッパとし、究極的にA　ゲルマン人＝新教＝工業革新地域　B　共産主義＝マジャール人核心地域　D　フランス＝イタリア工業核心地域　E　地中海半島部の周辺地域　F　バルカン周辺地域　G　ソ連邦の周辺地域　H　ケルト＝ゲルマン周辺地域　の8地域に区分している。西ヨーロッパの地域概念は、一定ではないが、本稿では地中海沿岸地域を含むとすると、西ヨーロッパとしてとりあげられるのはA、D、E、Hの4地域となる。ここで使われている核心地域の指標は　1　1000㎢当たりの鉄道延長の70㎞以上　2　製造工業の集中　3　酸性雨、降雨1ℓ当たりの水素イオン濃度25以上　4　1㎢当たりの人口密度100以上　5　年人口増加率0.2％以下　6　耕地1ha当たりの肥料投下量200kg以上である。この6つの指標によって選ばれた西ヨーロッパ核心地域（A、D）のうち、さらに累積が顕著なのは、ドイツ、デンマーク、スイス、オランダ、フランス北東部、イギリス（イングランド）である。

西ヨーロッパの民族はインドヨーロッパ語族のうちのケントウム（Centum）語系[5]のラテン（ロマンス）系とゲルマン（チュートン）系に属する。ラテン系で西ヨーロッパ以外に分布するのはルーマニア人とブラフ人である。マジャール人の見方は大いに異なるが、ルーマニア人によれば、彼等は、トラキア系のダキア人とローマ人その他の混血で、絶えず東方からの遊牧民族の移動ルートにあたり、トランシルバニア地方は彼らの避難地であったという。ブラフ人はローマ都市エピダウロスがアヴァール人によって破壊された後、7世紀その北東11㎞のところにドブロブニク（ラグーサ）を建設した民族である[6]。現在、バルカン山地に散在し、牧羊の生活をしているものが多い。ゲルマン系で西ヨーロッパ以外に分布するのは東ヨーロッパのポーランド、ハンガリー、ルーマニア、ユーゴスラビアそれにソ連邦のドイツ人、さらにユダヤ系のアシュケナージである。ラテン系はローマ帝国領にあってその文明の影響を強く受けた今日のイタリア人、フランス人、カタロニア人、スペイン人、ポルトガル人、サルジニア人である。フランス人のうち南部ではオック語を用いるが、これは北部のオイル語と異なり、よりラテン的である。

ローマ帝国はギリシア人やカルタゴ人によって植民地化されていた地中海沿岸を一つの世界にまとめあげた。さらにアルプスを越えてガリア（フランス）、ブルタニア南部に及び、さらにエルベ、ダニューブの線まで進出し、これらの地方に現在にまで連続する多くのローマ都市

を建設した。ローマ人はケルト、ゲルマン、スラブ、バルチアなどの諸民族と接触し、豊かなヨーロッパ文明の基礎を形作った。そのうちの最大のものはキリスト教であったが、初期の迫害を乗り越えてローマ帝国の国教となり、一体の存在となった。ローマ帝国が東西に分立したことによってキリスト教もローマカトリックとギリシア正教に分裂することになったが、このことは後世に大きな影響を与えることになった。宗教改革によってローマカトリックからルターリズム、カルヴィニズム、イギリス国教派が分れ、プロテスタンティズムは3派となった。ルターリズムは北ドイツからスカンジナビア半島に広がり、カルヴィニズムはオランダ、フランス、スイスに伝えられた。イギリスのヘンリー8世はローマ教皇との対立、破門からイギリス国教会を創設した。ドイツを中心とする宗教戦争を経て、16世紀後半にはローマカトリックとプロテスタントとの境界は現在とほぼ同じようになった。

カエサルの「ガリア戦記」やタキトスの「ゲルマニア」にゲルマン民族大移動前のゲルマンの社会が記されている。ゲルマンは、BC2世紀ころまではスカンジナビア半島の南部からユトランド半島、北ドイツにかけて居住していたと推定されているが、カエサルやタキトスのころにはライン川からダニューブ川流域にかけて広がっていた。彼らはもともと遊牧民族であったが、長い定住生活の中ですでに農耕を知っていた。オーディンと二人の兄弟神を信ずるゲルマンは針葉樹林や落葉広葉樹林に住む森の民として優れた文化を築きあげた。首長は世襲制ではなく、選挙制によって決定されていたことなど後世のヨーロッパに引き継がれたものが多いが、最大のものはゲルマン慣習法で、ローマ法とともに近代法の上に大きな影響を与えている。いわゆるゲルマン民族の大移動はフン族の圧迫によって始まった。ローマ帝国領内に移動し、すでに退廃、変質しつつあった古典文化の新たな担い手として、歴史の上に登場することになった。ゲルマンの部族であるフランク族がアラマン族やブルグンド族を糾合して建設したフランク王国（カロリング朝）は、カール大帝（768～814）の時代に絶頂期を迎えた。現在のフランスを中心に、東はライン川流域、南はイタリヤの北半分、さらにピレネー山脈を越えてスペインにまで版図を拡大した。彼はローマ教皇から帝冠を授けられ、以後「ローマ帝国を支配する尊厳なる皇帝」の称号を用いるにいたった。西ヨーロッパの誕生、成立である。カール大帝後の843年（ヴェルダン条約）および870年（メルセン条約）、西フランク王国（フランス）、東フランク王国（ドイツ）、ロタール王国（イタリア）に分裂し、以後ふたたび復活することはなかった。

III　西ヨーロッパ文化圏のボーダーランド

以上、述べてきたように西ヨーロッパ文化圏に含まれるのはラテン系とゲルマン系の民族の居住地域であり、ローマカトリックとプロテスタントの伝播地域である。そこでは調和された精神文化、高度に発達した科学文明、安定した民主政治のもとに豊かな経済生活が確保されている。その外側には民族でいえば、インドヨーロッパ語族のスラブ系、バルト系、イリリア系、ケルト系、ギリシア系、ウラルアルタイ語族のフィノウゴール系が、宗教でいえばギリシア正教＝東方正教（ロシア正教、ルーマニア正教、セルビア正教、ブルガリア正教、ギリシア正教）、イスラム教などが広がっている。

スラブ系は、カルパチア山脈の北から起こって5世紀に移動を開始し、7～8世紀には、東スラブ（ロシア人、ウクライナ人、白ロシア人）、西スラブ（ポーランド人、チェコ人、スロバキア人、ソルブ人、カシューブ人）、南スラブ（スロベニア人、クロアチア人、セルビア人、マケドニア人）の3派がそれぞれの地方に居を占めた。西スラブの中には、ポラベ人、オボドリッツ人、ルティツィ人、ポラメニア人（スロウィン人）などいずれも西進のあまり孤立し、

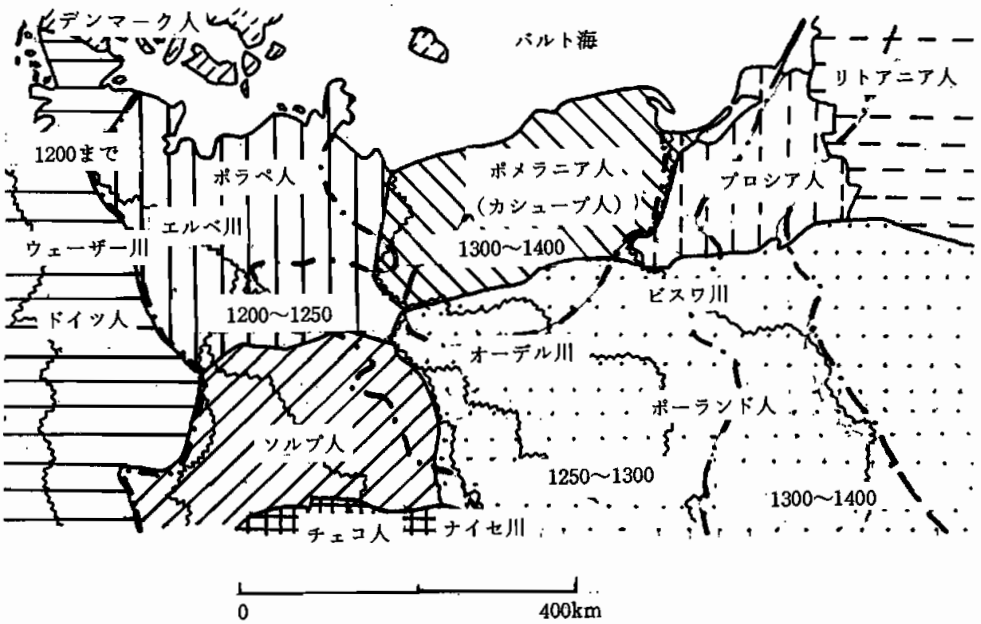


図1　10世紀の民族分布とドイツ人の東漸（J.AncelとN.J.G.Poundsによって筆者加筆・図中の年代はドイツ人東漸の年代）

ドイツ人に同化、融合されて、消滅した民族も多い。ソルブ人やかつてのポメラニア人に含まれていたカシューブ人はわずかに消滅を免れた民族である。ドイツの地が「スラブの墓場の地」といわれるゆえんである[7]。ポーランドでは966年、ローマカトリックを受け入れ、さらに1000年、グニエズノ大司教座を設立することによって西ヨーロッパ文化圏に含まれることになった。ホヘミアがローマカトリック化されるのは10世紀で、その後モラビア、スロバキアに東漸した。スロベニアとクロアチアは西ローマ帝国領であったためローマカトリック地域として今日にいたっている。

東南のセルビアは東ローマ帝国領であったためギリシア正教地域となり、言語はセルボ・クロアチア語として同一言語でありながら文字は、クロアチアではラテン文字、セルビアではキリル文字を用いている。さらに第一次世界大戦終結まではクロアチアはスロベニアとともにオーストリア＝ハンガリー帝国領に属していたのに対し、セルビアはすでに独立国であったという歴史がある。とくに両国の境界付近のスラボニア地方やクライナ地方は、オーストリア＝ハンガリー帝国が1578年、対トルコ政策として設置した「軍政国境地帯」（Militärgrenze）に当たり、屯田兵ともいうべき主としてセルビアからの入植民が迎え入れられたため、現在もクロアチア領内に多くのセルビア人がクロアチア人と混住している[8]。両民族間の感情的ともいえる対立にはこのような歴史的背景がある。

スラブ系、イリリア系とともにサテム（Satem）語系[9]に属するバルト系は、リトアニア人、ラトビア人を含み、消滅したものとしてプロシア人、スドービア人、クロアニア人、セミガリア人、セロニア人がある。インドヨーロッパ語の中ではもっとも古い言語といわれ、スラブ系はこのバルト系の分派である。バルト海沿岸にチュートン騎士団の勢力が及んだのは14世紀、ブレーメンの商人が来住してタリン（レバル）、ドルパット、リガ、ヴインダウ、バランゲン（いずれもハンザ同盟加盟都市）が建設されたのは12世紀である。ローマカトリックが伝えら

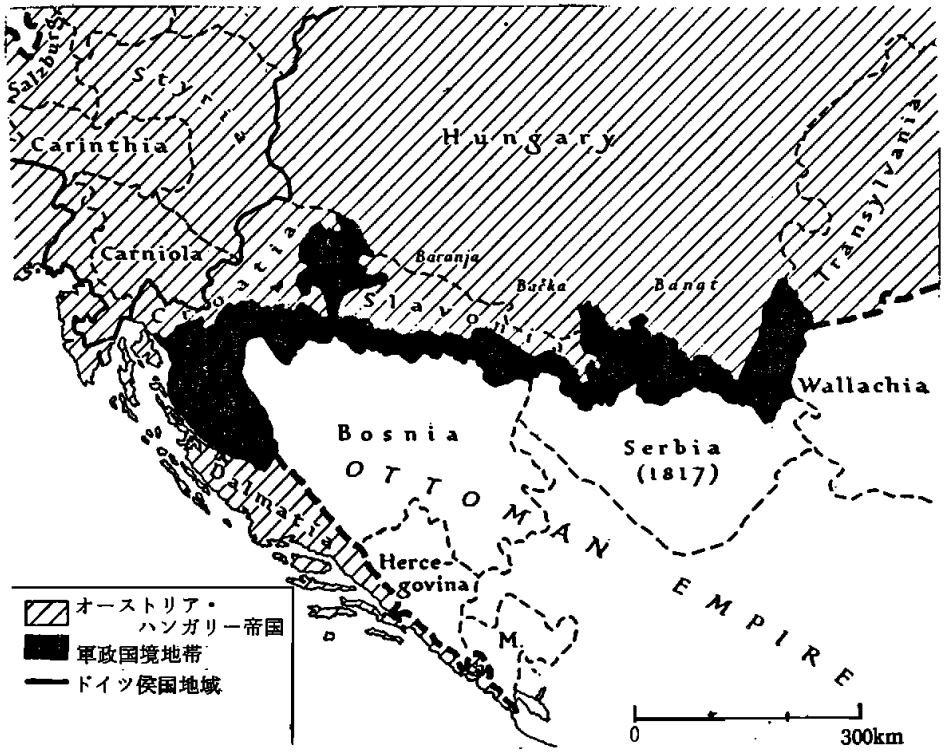
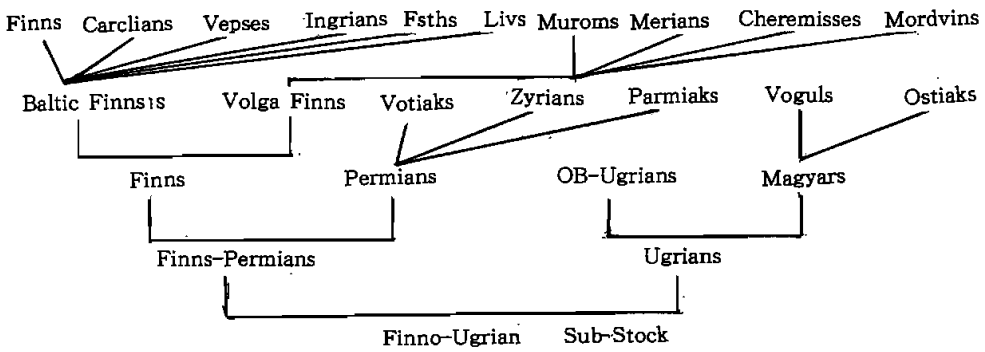


図2　オーストリア＝ハンガリー帝国の「軍政国境地帯」（G.W.Hoffman）

表1　フィノウゴール語族の系統



（C. S. Coon）

れたのもこの時代である。

フィノウゴール語族は、フィンランド人、カレニア人、それにラトビアに残るリボニア人、サンクトペテロブルク（レニングラード）付近に残るイングリアン系（ボード人、ライド人、イヨール人）、カレリア東方のベプス人である[10]。フィンランド人は1世紀ころ、一派が現在のエストニアから北上して先住民族であるラップ人を駆逐し、現在地に移動した。ローマカトリックがこの地に伝わったのは12世紀、スウェーデンによる統治の下でスウェーデンと対等の

地位が与えられた時代もあった。18世紀から20世紀にかけてロシア帝国の支配を受けたにもかかわらず、西ヨーロッパ化が早くから進められた。民族伝承として知られる「カレワラ」は、今日もフィンランド人の民族覚醒の精神的な支えとなっている。

東から西への遊牧民族の移動は、歴史を通じてくりかえされた。系統不明のフン族は370年ころ、アッティラにひきいられて東ヨーロッパに侵入して一時、大帝国を建設した。その後ゲピード、アヴァール、ブルガール（定住後、スラブ化）、カバル、ペチェネーグ、クマン、モンゴル、タタールなどの諸民族がいずれもヨーロッパに移動した。マジャール人は、9世紀末ハンガリー盆地およびその周辺に移動してここに定住し、今日にいたっている。10世紀から11世紀にかけてローマカトリックが伝わったが、トルコの支配を脱し、ハプスブルグ家による支配の時代を迎えるにいたって、西ヨーロッパ文化圏に入った。東ヨーロッパは、複雑な地形に影響されて、これら移動民族のまとまりを阻み、次第に分化して集団ごとに独自の文化をつくりあげた。そうしたことはとくにボヘミアの森周辺、スロバキア地方、トランシルバニア地方、東アルプス地方、ボスニア地方、ダルマチア地方、ドブルジャ地方、マケドニア地方に顕著である。

イスラム教がヨーロッパに伝えられたのは、イベリア半島では8世紀の中頃、バルカン半島では14世紀から15世紀末にかけてである。イスラム教の最後の拠点、グラナダが陥落し、イスラム教がイベリア半島から一掃されたの1492年である。北部のビスケー湾沿岸のアウトゥリアス地方は最後までイスラムの侵入を許すことがなかった。バルカン半島ではオスマントルコ帝国の北進にともないバルカン半島の大部分がイスラム化された。わずかにイスラム化を免れたのはモンテネグロ（ツルナゴーラ）を含めてのアドリア海沿岸とギリシアの島々であった。この時代、ウイーンが1529年と1683年のトルコの攻撃に耐えて、包囲を守りきった歴史的意義は大きい。バルカン半島には現在もイスラム教徒（ムスリム）が残るが、とくにボスニア・ヘルツェゴビナでは12.3%がイスラム教徒である。I．アンドリッチの『ドリナの橋』[11]につぎのような描写がある。

「……町の人びとの生活は、この橋とそのカピヤの上で演じられる。それをめぐり、それとむすびついて流れすぎていく。個人のであれ、家庭のであれ、また町全体のであれ、ともかくどんなできごとについての話でも、《橋で》という言葉には、再三再四ぶつかるのである。事実、幼児たちはドリナの橋であんよを始め、少年たちも最初の遊びをおぼえる。ドリナ左岸で生まれたキリスト教徒の子供たちは、誕生後幾日もしないうちに橋を渡る。一週間以内に洗礼のため教会へ行くからである。それ以外の、右岸で生まれた子供や、洗礼を必要としない回教徒の子供たちも、その父や祖父と同じく、幼いころの大半を橋の近所ですごしたものである。……」

この町はセルビアとサワ川の上流、ドリナ川をへだてて立地するボスニア・ヘルツェゴビナのヴィシェグラードである。この川には、1571年に建設されたドリナ橋が架かっていた。カピヤとは屋台店風のコーヒ店である。これらの地方には、イスラム教のモスク寺院がみられ、西ヨーロッパの人々の目にはエキゾチックな景観として受けとめられている。ロシア正教は、ギリシア正教の中で主要な位置を占めている。ロシア皇帝イワン3世は、1453年にビザンチン帝国が滅亡すると、次第にギリシア正教の後継者をもって君臨することになった。ロシア正教会の建築様式は、ビザンチン様式によって統一され、玉ねぎ状のドームによって代表され、ロシア的な都市景観を形づくっている。

西ヨーロッパ文化圏のボーダーランドとして取り上げたい範域は、民族の上ではラテン系、ゲルマン系以外のスラブ系、バルト系、ケルト系、フィノウゴール系などの分布地域であって、

ローマカトリックとプロテスタントが信仰され、しかもラテン文字を用いている地域である。一部、ギリシア正教やイスラム教が混在している地域もこの中に含めることにしたい。このような基準によって求められた範域は、フィンランド、エストニア、ラトビア、リトアニア、ポーランド、ドイツのラウジッツ、チェコスロバキア、スロベニア、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、イタリア南部、マルタ、サルジニア、スペイン南部、プルターニュ、アイルランド西部、スコットランド北部である。この基準からするならば、ユーゴスラビアのセルビア、モンテネグロ、マケドニアそれにアルバニア、ブルガリア、ギリシア、ヨーロッパトルコは範域の外側と位置づけられることになる。

Ⅳ　東ヨーロッパの地理的範囲

東ヨーロッパという地域区分は比較的新しく、それは地理的区分というよりもむしろ政治的な区分であり、かつてワルシャワ条約機構（WTO）や共産主義経済会議（COMECON）に加盟していた国家群を指す呼称である。その中にはソ連邦を含まない場合が一般的である。かつてはP．デフォンテーヌ[12]によればチェコスロバキア、ポーランド、ハンガリー、ルーマニア、ブルガリア、スイス、リヒテンシュタイン、オーストリア、ドイツは中央ヨーロッパに、ユーゴスラビア、アルバニア、ギリシアは地中海ヨーロッパにそれぞれ含められている。J．ゴットマン[13]は、さらにソ連邦を東ヨーロッパに区分している。N．J．G．パウンズ[14]、M．R．シャックリトン[15]、A．F．マトン[16]の区分にはいずれも東ヨーロッパの区分はない。東ヨーロッパがみられるのはG．Wホフマン[17]の区分によってであり、ポーランド、チェコスロバキア、ハンガリー、ルーマニア、ブルガリア、ユーゴスラビア、アルバニアを東ヨーロッパの範域としている。J．ゴットマン[18]の区分ではフィンランドをポーランド、チェコスロバキア、ハンガリー、ルーマニア、ドイツ、オーストリアなどとともに中央ヨーロッパの中に含めている。

しかしながらソ連邦のペレストロイカ、東ヨーロッパの変革が進められる中で、東西ドイツの統一、バルト三国の独立が実現し、オーストリア、ハンガリー、チェコスロバキア、ポーランドの接近がとり沙汰される今、いつまでも東ヨーロッパの地域概念にとらわれる必要はなく、新しいヨーロッパの秩序の中で地域区分の再検討が行われるべきである。それにしても第二次世界大戦後の東西対立の構図の中で東ヨーロッパの概念が定着しすぎたきらいがある。この地域概念もやがて解消し、戦後のある特定の時代にだけ存在したとされる時代が来ることであろう。本稿ではそうした東ヨーロッパの意味ではなく、ボーダランドを含め、西ヨーロッパ文化圏と東スラブ（ロシア）文化圏さらにイスラム（トルコ）文化圏が接触、交錯し、文化的、社会的、政治的、経済的にこれらの影響を受け合ってきた国家群を一連の地帯（tier）としてとりあげることにしたい。ポーランドの歴史学者O．ハレッキーは、西ヨーロッパ中心のヨーロッパ史に対して東ヨーロッパに視点を置いたヨーロッパ史の必要性を強調した[19]。この地帯は決して統一されたまとまりを持った単位ではなく、多種、多様の要素を含む複雑な歴史的には悲劇の地帯である。それにもかかわらずこれを地帯として取り上げるのは将来注目されるもう一つのヨーロッパであるからである。

この地帯を北、フィンランドから南、ギリシアにかけて4区分すると、

1　フィンランド、エストニア、ラトビアの地域
2　リトアニア、ポーランドの地域
3　チェコスロバキア、ハンガリー、スロベニア、クロアチアの地域
4　セルビア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、モンテネグロ、マケドニア、アルバニア、ルー

マニア、モルドバ、ブルガリア、ギリシア、ヨーロッパトルコの地域

となる。

1の地域は、歴史的に早くからデンマーク、スウェーデン、ドイツの影響を受け、ハンザ同盟やチュートン騎士団との関係が深かった地域である。フィンランドの一人当たりのＧＮＰは22060　ＵＳドル（3位）ときわめて高く、エストニア、ラトビアはソ連邦の中でもっとも進んだ共和国であった。バルト三国や他の東ヨーロッパ諸国が将来、民族的アイデンティティのもとに中立主義を国是としているフィンランドを模範として自国の政治的、経済的安定をもとめているのは当然といえる。同系のフィンランド人とエストニア人との関係は親密で、従来からもフィンランドからエストニアへの渡航にはビザを必要としない特別の措置がとられていた。

2の地域は、14世紀から18世紀にかけてポーランド・リトアニア君主連合国をつくり、一時はロシアを征服するほど強大であった。その後、ポーランドはロシア、プロシア、オーストリアにより分割されたが、リトアニアは常にポーランドと運命をともにした。

3の地域は、第一次世界大戦終結まではいずれもハンガリー＝オーストリア帝国領の中にあった。17世紀末、トルコの敗退以後、ハンガリーはハプスブルグ家の支配を受け、1867年の和約（Ausgleich）によって二重帝国が成立した。ボヘミア、モラビア、シレジア、ガリシア、ブコビナ、スロベニアはオーストリア領、スロバキア、トランシルバニア、クロアチア、ダルマチア、イストリアはハンガリー領、ボスニア・ヘルツェゴビナはオーストリアとハンガリーの共同管轄であった。1989年の一人当たりのＧＮＰではオーストリア17360（13位）と高いが、その他チェコスロバキア10130、ハンガリー2560（いずれもＵＳドル）と低い。

4の地域については、バルカンの呼称がある。バルカンとはトルコ語の山地を意味し、セルビア以南のユーゴスラビア、アルバニア、ブルガリア、ギリシア、ヨーロッパトルコを含む。Ｇ．Ｗ．ホフマンは、その北側に隣接するルーマニア、ハンガリー、オーストリアの一部をその中に含むことができると述べている[20]。バルカン半島はイベリア半島やイタリア半島のように山脈によってその地域的範囲を決定することができない。1989年の一人当たりのＧＮＰではルーマニア6570、ギリシア5340、ユーゴスラビア2490、ブルガリア2320、アルバニア1265（いずれもＵＳドル）と全体に低い。ユーゴスラビアは南北の格差が著しく、全土の7.1％の人口を占めるコソボ自治州の一人当りの所得を100とすると、8.4％の人口を占めるスロベニアは165と、大きなへだたりがある。この地域は、ボーダーランドの範域外で西ヨーロッパ化がまだ不十分で、ともすると偏狭なショーヴィニズムが台頭し勝ちで、民族をめぐって隣接国との間に紛争を起こす危険性をはらんでいる。

東ヨーロッパは、総人口約1億5000万で、ヨーロッパ全体（ソ連邦はロシア、ウクライナ、白ロシアの合計、ウラル山脈以東を除く）の22％にあたる。ちなみに西ヨーロッパは約3億4000万（50％）、東スラブは約1億9000万（28％）である。最多人口国はポーランド（3785万）、ついでユーゴスラビア（2369万）、ルーマニア（2315万）（1986年）、最多民族人口は、ポーランド人（3407万）、ついでルーマニア人（1757万）、マジャール人（1302万）、チェコ人（951万）、ギリシア人（888万）、セルビア人（875万）、ブルガリア人（803万）である。

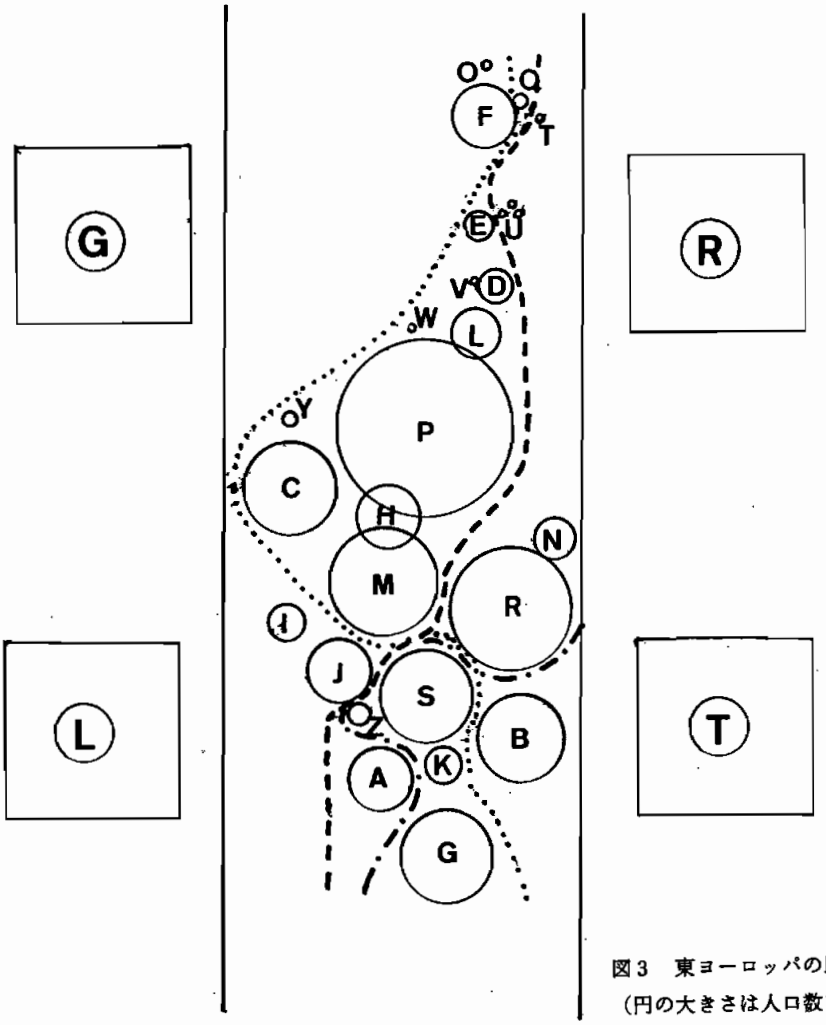


図3　東ヨーロッパの民族
（円の大きさは人口数を示す）

ローマカトリックとギリシア正教の境界
ラテン文字とキリル文字の境界
旧ソ連圏とその他の境界

Ⓖゲルマン世界　Ⓛラテン世界　Ⓡロシア世界　Ⓣイスラム（トルコ）世界

Pポーランド人	Rルーマニア人	Mマジャール人	Cチェコ人	Gギリシア人
Sセルビア人	Bブルガリア人	Fフィンランド人	Jクロアチア人	Hスロバキア人
Aアルバニア人	Nモルドバ人	Lリトアニア人	Iスロベニア人	Kマケドニア人
Dラトビア人	Eエストニア人	Zモンテネグロ人	Qカレリア人	Yソルブ人
Oラップ人	Wカシューブ人	Tペプス人	Uイングリア人	Vリボニア人

（人口の多少順に民族名列記）

V　東ヨーロッパの地理的性格

G．W．ホフマンは、東ヨーロッパの地理的性格として、漸移性（transition）、不安定性（instability）、多様性（diversification）をあげている[20]。東ヨーロッパの漸移性と多様性が不安定性を招いているといえる。

西から東への漸移 を考える時、西岸海洋性気候←→湿潤大陸性気候、地中海性気候←→湿潤大陸性気候の漸移があり、落葉広葉樹林←→針葉樹落葉樹混交林、地中海常緑広葉樹←→針葉樹落葉樹混交林の漸移がある。地形の上では、北方にはバルト海があり、その南にはドイツからポーランドにかけての低平な北ヨーロッパ平原が展開する。北の沼沢地と南の台地の間にはビスワ川、ワルタ川が西流し、ワルシャワ周辺にはマゾフシェ低地、ポズナニ周辺には南ビエルコポルスカ低地とクヤービ低地が広がっている。ドイツとロシア両大国に挟まれたポーランドの3次にわたる分割以来、第二次世界大戦後のポーランド領土の西への移動に及ぶ歴史などがこのことを如実に示している。J．イヴァシュキェヴィッチは、『ウトラタの水車小屋』[21]の中で次のような描写をしている。

「……途中の景色はすばらしかった。乾燥した砂まじりの畑が緑の窪地の上でふいにとぎれた。窪地の両側は緑の草地がかなり遠くまでつづき、道の中央にはまがりくねった小川がきらめき流れていた。水草がおい茂っていたが流れはかなり早かった。水辺の所々に百合が咲いていた。水は明るく澄んで、空のよう軽やかだった。馬車はライ麦がまばらに生えている乾ききった畑と、最近刈り取られたあとへ新しい草の芽がもう冴えた緑をみせている牧草地との間の、砂ぼこり多いでこぼこ道を、はしをえらんですすんでいった。丘の上のような場所、というよりはむしろ道のまがり角に出ると、牧草地が眼前にひらけ、小川はいくつかの湾曲部をつくり、堰にはばまれてかなり大きな池にそそいでいた。池は広々として、周囲にハンの樹や柳を繁らせ、波もたてず、眠たげであった。日はますますつよく照りつけていた。……」

ゆるやかな起伏の上には牧草とライ麦などの畑地が広がり、それを浅く刻む川はメアンダーリングしながら流れ、所々に沼沢が展開するといったこの地帯に共通の景観である。

北ヨーロッパ平原の南にはハルツ山脈、チューリンゲン森、エルツ山脈、ボヘミア森、ズデート山脈、モラビア高地、カルパチア山脈、トランシルバニアアルプ山脈、ビホール高地、さらにバルカン半島にかけてジナルアルプ山脈、ピンドス山脈、バルカン山脈、ロドピス山脈がはしる。これらを縫う交通路としてはまず北からハンガリー盆地に向かうものに西ドイツバイエルンからダニューブ川沿いにハンガリー盆地に入り、鉄門を経て黒海に達するルート、これらに向かってサクソニアからラベ（エルベ）・ブルタヴァ（モルダウ）川沿いにボヘミア盆地を経てダニューブ川畔のリンツに至るコース、シレジアからオーデル川、川沿いにシレジアの門を経てモラバ川をくだりハンガリー盆地に至るコース、ガリシアからビスワ川をさかのぼりドクラ峠を越えてオンダヴァ川をくだりハンガリー盆地に至るコースがあった。ダニューブ川に沿ってブダペストやベオグラードの都市が発達した。ハンガリー盆地から南に向かってモラバ川・ヴァルダール川の回廊を経てエーゲ海（サロニカ）に至るコース、ニス付近でこれから分かれてニサバ川沿いにマリッツガリー河谷に入り、ソフィアを経て黒海（イスタンブール）に至るコースがあった。ハンガリー盆地から西に向かってサバ川、ドラヴァ川に沿いリュブリヤーナを経てアドリア海（トリエステ）に至るコースもあった。これらの交通路は、北海、バルト海、黒海、エーゲ海、アドリア海を結び、歴史時代を通じて琥珀、塩、香辛料、染料、織物などの交易に重要な役割を果たしてきた。東から西へ、また西から東へ民族移動はくりかえされ

たが、こうした山地は障害物であっただけではない。山地によって隔てられるA地域とB地域の隣接地域どうしでは交通路によって文化の交流が行われる。増田四郎は、「西ヨーロッパというところは、ゲルマン系、ローマ系の、観念上考えられた言語の両極を共用しつつ、実際にはちょうど原色をまぜあわせたいろいろの中間色というか、混合色のあやをなしている舞台だということになる」と述べ、言語の漸移性をとりあげている[22]。このことは、東ヨーロッパについてもいえることで、たとえばチェコ語とスロバキア語は西から東に、また東から西に移るにしたがい次第に変化して、チェコ語プロパーからスロバキア語プロパーの二言語の両極に本拠を置いている[23]。インドヨーロッパ語族の中に孤立する異質のマジャール語などを除くならば西ヨーロッパ文化圏と東スラブ（ロシア）文化圏の核心を両極として言語の漸移性が認められるという。

民族移動は、その過程の中で母集団の分布を決定し、周辺にはちぎれ雲のように小集団を拡散させ、さらに後世の移動を加えていくつかの民族が相互に入り混じって錯雑し、複雑な民族分布を示した。前述した山脈にとりまかれた盆地などのほか、ポーランドのポモージュ地方やマズール地方の湖沼群、ドイツのメッケレンブルグ地方の湖沼群を含めて、それぞれ民族の居住空間を提供した。東ヨーロッパではとくに同じ民族の中においてもさらに細分化された文化の小領域が認められる。音楽でいうならばポーランドの民族音楽として知られるマズルカは16世紀ころのポーランドのマズール地方の舞踊から起こったものであるし、クロアチアのコロ舞曲には地方ごとにそれぞれ少しずつ異なったローカル色が認められるという。

東ヨーロッパにおいて、国内にもっとも多くの民族を含んでいるのはユーゴスラビアで、人口5000以上の民族だけでも20を数える。すなわちセルビア人（41.9%）、クロアチア人（23.1%）、スロベニア人（8.5%）、マケドニア人（5.6%）、イスラム（5.3%）、アルバニア人（4.9%）、モンテネグロ人（2.8%）、マジャール人（2.7%）、トルコ人（0.9%）、その他ジプシー、スロバキア人、ブラフ人、ブルガリア人、ドイツ人、ルーマニア人、ウクライナ人、チェコ人、イタリア人、ロシア人、ユダヤ人である。ルーマニアは、同じく17民族を数える。すなわちルーマニア人（86.0%）、マジャール人（セーケイ人を含む）（9.2%）、ドイツ人（2.2%）、ジプシー（0.6%）、ユダヤ人（0.5%）、その他ウクライナ人、セルビア人、ロシア人、スロバキア人、タタール人、トルコ人、ブルガリア人、チェコ人、ギリシア人、ポーランド人、アルメニア人、クロアチア人である[24]。ドイツ人（ザクセン人）は10世紀以来、政策的に東方へ進出、移住したことによって東ヨーロッパから現在のソ連邦の広大な地域に居住することになった。

複数の民族が混住している地域は、政治的不安定性を生ずる。第二次世界大戦前、ドイツ人とポーランド人が混住していたポーランドコリドール地方や今日のクロアチアのスラボニア、クライナ地方、ルーマニアのトランシルバニア地方などである。バルカンは「ヨーロッパの火薬庫」といわれたのは民族分布が複雑な上、大国の利害、論理がからむところにその根源があった。第一次世界大戦後のヴェルサイユ条約（1918年1月）、サンジェルマン条約（1919年9月）、トリアノン条約（1920年6月）、ヌイイ条約（1919年11月）セーブル条約（1920年8月）によって国境線が確定して新しいヨーロッパの秩序がうちたてられたが、民族問題は根本的には解決することはなかった。第二次世界大戦中から後にかけてのソ連邦による、バルト三国の併合をはじめとする国境線の変更は少数民族の自決権を無視し、時代逆行ともいえる社会主義大国の論理を一方的におしつけることになった。フィンランドからはペツァモ港を含むカレリア（東フィンランド）を、ポーランドからは東ポーランドを、ドイツからはカリーニングラード（東プロシア北半分）を、チェコスロバキアからはトランスカルパチア（ルテニア）を、ルーマニ

表2　東ヨーロッパ各国の民族構成（1000人）

全人口（1960年）	東ドイツ 17125	ポーランド 29965	チェコスロバキア 13776	ハンガリー 10028	ルーマニア 18567	ブルガリア 7943	ユーゴスラビア 18607	アルバニア 1660
ドイツ人	16975	50	165	200	400		60	
ポーランド人		29540	85		8			
チェコ人			9050		12		30	
スロバキア人		20	3830	60	25		86	
ソルブ人	120							
マジャール人			425	9520	1700		505	
ルーマニア人				15	15960		60	
ブラフ人							80	
ブルガリア人					13	6980	62	
マケドニア人							1040	10
セルビア人				20	43		7800	
クロアチア人				25	5		4290	
スロベニア人				5			1590	
モンテネグロ人							515	5
ウクライナ人		150	70		65		40	
白ロシア人		100						
ロシア人		20	5		40	12	13	
ジプシー		30	100	60	115	210	90	10
ユダヤ人		30	18	100	100	7	5	
トルコ人					15	670	165	
タタール人					23	7		
ギリシア人					11	9		40
アルメニア人					7	23		
イタリア人							25	
ガガウス人						10		
カラカッチ人						3		
アローム人								10
アルバニア人							915	1580
イスラム系セルボクロアチア人							980	
主要民族率1930～39年（%）	99	69	62	92	73	87	82	92
1960年	99	99	93	95	86	88	87	95

アからは北ブコビナ、ベッサラビアを北から南に向けてあたかもスライスするかのように52万㎢を併合し、国境線を西に移した。

Ⅵ 民族と国家

歴史を通じて生成、分裂、統合、移動、消滅をくりかえしながら現在、存在する数多くの民族が形成された。民族（People, Ethnic group）の概念は歴史学、民族学、政治学、地理学などによって、その意味するところがそれぞれ異なっていて民族とは何かの問いには容易に答えられない。とくに国民（nation）の概念と民族の概念が混同されることや言語を民族分類の基準にするならばどこまでを方言、どこからを独立の言語とみなすかの問題がある。ここでは民族を言語、宗教、伝承、歴史、生活習慣などの文化を共有し、それ自体が血縁的、地縁的共同体であるとする意識によって結ばれる集合単位をさすと考える。ユダヤ人やユーゴスラビアのムスリムなどのように宗教が第一義的である民族もあるが、大部分は言語が同一である集団を民族としてとらえることが多い。

民族と国家の関係を考えるにあたって、少数民族（Ethnic minority）をめぐって二つの類型に分けることができる。一つは母集団をなす民族が主権国家をつくり、周辺に散在するその民族が他の国家に属している場合、これにはその民族が属している国家に不満を抱き、反発している場合とその民族が属している国家と協調できる場合がある。二つにその民族に母集団がなく、その民族がどの国にあっても少数民族である場合である。これには少数民族ながら母集団として一つの国家に属している場合と世界のどこにも民族国家をもたない場合がある。

ユーゴスラビアのセルビア共和国に含まれるコソボ自治州（旧称コソボメトヒア〈1946～71〉）[25)～28)]には、多くのアルバニア人が居住し、第七の共和国（スロベニア、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、セルビア、モンテネグロ、マケドニア６共和国）の樹立を究極の目標として、民族運動が展開されている。1912年までトルコ領であったコソボ地方は、その後ユーゴスラビア領となり、セルビアの属州、コソボ自治州となったが、セルビア人やそれにもましてアルバニア人のこの地への移住は17～18世紀以来続いていた。アルバニア人は、古代イリリア人の後裔で、ローマ帝国にも頑強に抵抗した歴史があり、きわめて誇り高く、強固な民族意識に支えられている。コソボ自治州の民族構成は、アルバニア人77.4％、セルビア人13.2％、モンテネグロ人1.7％、イスラム3.7％、トルコ人0.8％、ユーゴスラビア人0.2％、その他3.0％となっている（1981年）。コソボ自治州19県のうちアルバニア人がもっとも多いのはメトヒア盆地からコソボ盆地との間の山地、マケドニアのスコピエ東北にかけてである。モンテネグロやマケドニアにもアルバニア人の居住が広がっている。コソボ自治州のアルバニア人は出生率が高く、人口増加が著しい。コソボ自治州全体の人口は、1948年498245（コソボ自治州のうち68.4％がアルバニア人）、1981年1584560（77.4％）と増加し、アルバニア人の比率も高まっている。多数派のアルバニア人と少数派のセルビア人の対立が続くなか、1988年、セルビア政府の権限強化に反発したアルバニア人によるストライキやデモが州都プリシュチナを中心に起こった。迫害を受けたとしてセルビア人を保護するため、機動隊が導入されて事態が緊迫化した。ユーゴスラビアの連邦制は、形式的には民族が主権をもつ共和国から成り立ち、すべての民族の平等と各民族の自決権を認めるものである。しかし民族と少数民族は区別され、コソボ自治州のアルバニア人は民族とは認められず、少数民族の地位から脱することができないでいる。この点にアルバニア人の不満が絶えずある。

ルーマニアのトランシルバニア地方には多くのマジャール人が居住している[25)～28)]。トランシルバニア地方は、ルーマニア語ではアルデアル（Ardeal)、マジャール語ではエルデーイ

（Erdély）と呼び、互いに自民族の発祥地であると主張しあっている。1867年以来、オーストラリア＝ハンガリー帝国のハンガリー行政区の一部となっていたが、第一次世界大戦後の1920年、トリアノン条約を連合国との間に締結することによって、ハンガリーはトランシルバニア地方をルーマニアに割譲した。トランシルバニア地方には、マジャール人のほかに、その一派とみられている50万のセーケイ人がいるが、言語、文化などはマジャール人と若干、異なっている。ルーマニアは1968年、従来の行政区画を39郡１特別市（ブカレスト）に改めた。これによって従来のマジャール自治区（ムレシュ地方）は廃止され、民族を越えての平等保障、見方をかえればマジャール人のルーマニア化が強制されることになった。しかしこのことは民族の母集団、ハンガリーとの関係を強めようとする彼らの民族意識をかえって高揚させることになった。民族運動の抑圧に不満をもつマジャール人の中には国外に亡命する者が生じ、ルーマニア、ハンガリー両国間の関係が悪化した。以上コソボの問題にもトランシルバニアの問題にも共通している点は、アルバニア人やマジャール人は、ともにユーゴスラビアやルーマニアでは少数民族で、母集団の民族国家が隣接して存在していることである。彼らは、母集団の民族国家に帰属することを究極的には希求しながらも、それが達成できない状況の中で、ある程度の自治に甘んずることを余儀なくさせられている。この際、そこで認められる自治のあり方が問題となる。

チェコスロバキアは1990年４月20日、正式な国名を「チェコとスロバキア連邦共和国」と決めた。西部のボヘミア地方、中部のモラビア地方がチェコ人、東部のスロバキア地方がスロバキア人である。チェコスロバキアの民族構成[25)~27)]は、チェコ人64.3％、スロバキア人30.5％、その他マジャール人、ドイツ人、ポーランド人、ウクライナ人、ロシア人などである。94.8％までがチェコ人とスロバキア人で第二次世界大戦後、ここにおいても東ヨーロッパの他の国と同じように民族の同質性を強めつつある。スロバキアはとくにマジャール人が少数民族として分布している。かつてオーストリア＝ハンガリー帝国領ハンガリー行政区に属していたためで、南部に広がっている。もともとスロバキア人のプロパーの地域はバンスカー・ビストリツァを中心とする中央スロバキア州で、現在プラチスラバに置かれているスロバキアの首都を、この地方のマルティンに置こうという案があったほどである。チェコスロバキアの行政区画はチェコ１市７州、スロバキア１市３州に区分され、スロバキアの１市は首都プラチスラバ、３州は中央スロバキア州のほか、東西のスロバキア州である。スロバキアの民族構成は時代によって比率に変化がある。かつてはマジャール人の比率が高く、オーストリア＝ハンガリー帝国時代には30％であったが、その後次第に低下し、今日では12％になっている。これは住民の交換を含めた流入、流出によって生じた部分もあるが、個人単位の民族転換によるものも含まれる。複数の民族の混住地域において、バイリンガルの場合、民族の転換をはかることは可能である。始めマジャール人であった人がスロバキア人になるといったようなことである。時代の推移に合わせて生活のために、就職のために安定した有利な言語の選択が必要になってくるからである。言語即民族という意味では民族は適応できる保護色の性格をもっている。スロバキアのマジャール人は今日、50万といわれるが、トランシルバニアのマジャール人のような不満をもっていないのはチェコスロバキア政府の対少数民族政策が比較的穏健なためである。

ドイツ人の国家とみなされているオーストリアにも少数民族をかかえている。クロアチア人35000、スロベニア人24000、マジャール人11000、チェコ人5000などである。クロアチア人とマジャール人は、東部のブルゲンランド州、スロベニア人は、南部のケルンテン州に分布している。

ブルゲンランド地方は、第一次世界大戦終結まではオーストリア＝ハンガリー帝国の中でハ

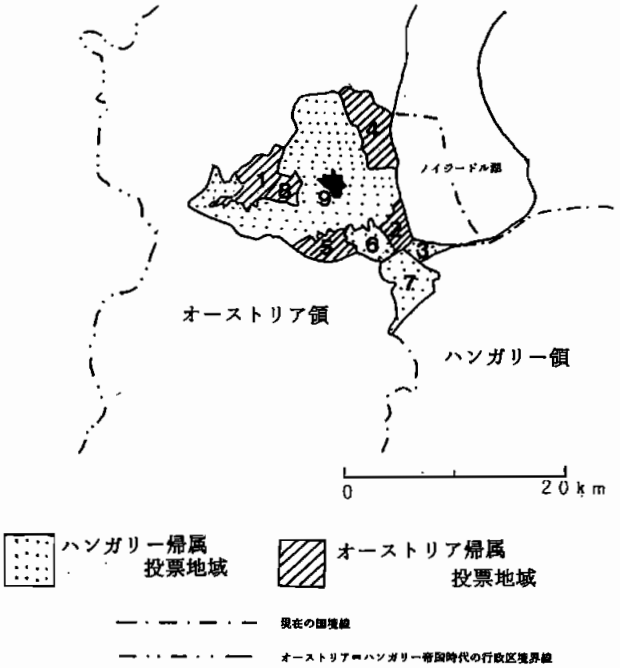


図4　ソプロン地区の住民投票（A.F.Burghardt）

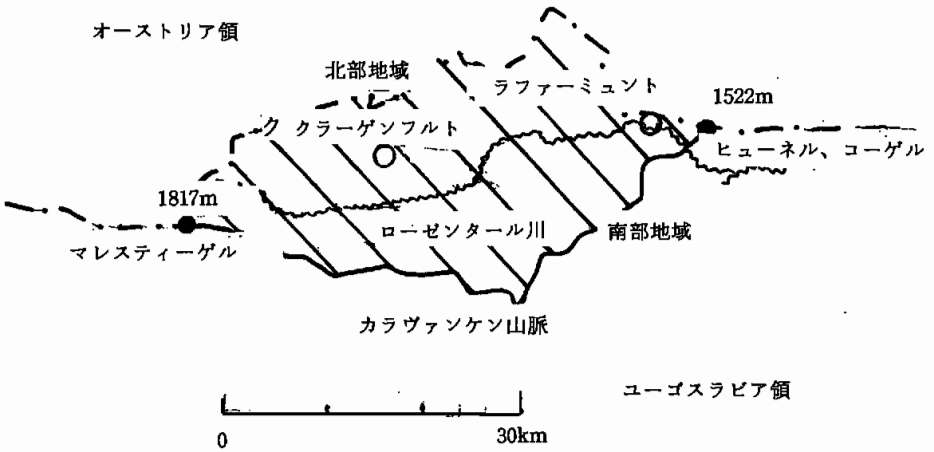
表3　ソプロン地区の住民投票

	地　区	言　語	票　数	(%)	
				オーストリア	ハンガリー
1	Agfalva	ドイツ語	848	83	17
2	Balf	ドイツ語	595	60	40
3	Fertöbóz	ドイツ語	342	22	78
4	Fertörákos	ドイツ語	1370	61	39
5	Harka	ドイツ語	581	90	10
6	Kópháza	クロアチア語	813	31	69
7	Nagyczenk	マジャール語	1039	0	100
8	Sopronbánfalva	ドイツ語	1177	81	19
計				55 (3607)	45 (3007)
9	Sopron		17388	27 (4620)	73 (12327)
合計（結果）			24063	35 (8227)	65 (15334)

24063−(8227＋15334)＝※502（票数）は棄権　地区の番号は図4の番号に対応　(A.F.Burghardt)

ンガリー行政区に属していたが、1919年のサンジェルマン条約によってオーストリアへの移譲が決められた。ハンガリー行政区時代、ここはモソン、ソプロン、バリの3州であったが、新しい国境線は、その西半分をオーストリア領とするものであった。サンジェルマン条約によれば、ソプロン付近は「（ノイジードル湖）ノ南岸ニ於テ（ホーリング）ト（ビデグシェッグ）トノ間ニ選定スヘキ地点ニ至ルノ間、（ニキッチ）及（チンケンドルフ）ノ東方（ケヴェシュト）及（ネメト、ペレステッグ）ノ西方を過ルモノ」となっていた[29]。この地域の所属をめぐってハンガリーから抗議があり、住民投票が行われた結果、ソプロン全体ではハンガリー帰属15334票（65%）、オーストリア帰属8227票（35%）となって1921年12月14日、ハンガリー領への編入が決定した[30]。このことにより以来、ハンガリーではソプロン市を「ハンガリーの中でもっとも忠実な町」として称賛されている。

ケルンテン地方のほうは、第一次世界大戦終結まではオーストリア＝ハンガリー帝国の中でオーストリア行政区に属していた。サンジェルマン条約によれば「（ベック）ヨリ東方に向ヒ標高1817（マレスティーゲル）ニ至ルノ間（カラヴァンケン）ノ分水嶺ニ依ル」から「次テ東方ニ向ヒ標高1522（ヒューネル、コーゲル）ニ至ルノ間（ラファーミュント）ノ北方ヲ過ルモノ」としたが、この線の南で帰属を問う住民投票が行われることになった[31]。この地方をさらに東西に線を引いて、南部、北部別々に投票を実施しようとした。先ず投票を行なった南部地域でオーストリア帰属22025票（59%）、セルブ・クロアート・スロベーン（ユーゴスラビア）帰属15279票（41%）となったため北部地域のクラーゲンフルト周辺では投票に至らず、これにより1920年10月10日、ケルンテン地方全域がオーストリア領に編入された[32]。これによって結局、カラヴァンケン山脈がオーストリアの南の国境線となった。これらの住民投票は、ドイツ人以外の少数民族の自決権を尊重したものであった。オーストリア政府は、1955年の国家条約後も少数民族に対して母国語教育に配慮するなどの政策をとっているが、これを求める者は必ずしもすべてではなく、むしろドイツ語教育の徹底を望んでいる者が多い。この傾向はブルゲンランド地方に居住するクロアチア人にとくに強い[33]。



住民投票の結果、オーストリア領に編入された地域

（『同盟及聯合国ト墺地利国トノ平和条約並議定書及宣言書』）

図5　ケルンテン地方の住民投票

ソルブ人は、ベルリンの南方ラウジッツ地方、シュプレー川流域に居住する西スラブに属するドイツ国内のみの少数民族である。方言のうち、上ラウジッツのソルブ語はチェコ語に、下ラウジッツのソルブ語は、ポーランド語と近い関係にあるが、それにもかかわらずソルブ人は独自の歴史、文化、伝統を保持している。ヴェンド人ともラウジッツ人とも呼ばれるこの民族の人口を、正確に把握することは困難であるが、35000～70000と推定されている。ドイツ語とのバイリンガルを含めると、10万以上におよぶと考えられるが、世代の交替によって次第に減少をきたしていることはたしかである。かつての東ドイツ政府は、ソルブ語を公的に使用することを認め、学校教育でも使用されている[34]。19世紀以来、消滅したヨーロッパ言語にはダルマチア語（ラテン系）、プロシア語（バルト系）、マンクス・ゲーリック語、コーンウォール語などがあるが、今日では話し手の少ない言語、例えばカシューブ語（ポーランド）、スコットランド・ゲーリック語、ウエールズ語、フリースランド語（オランダ）、バスク語（スペイン、フランス）、ブルトン語（フランス）などを残すため少数言語集団＝少数民族を擁護することが国際的世論となりつつある。

ヨーロッパにあって最後まで取り残されていた少数民族ジプシーも、次第に民族意識に目覚め、1991年７月、はじめて全ヨーロッパ安全協力会議（ＣＳＣＥ）の少数民族問題専門家会議に対して保護を訴えた。ジプシー（Romany, Zigeuner）は、インダス川流域を発生地とし、西方に移動して15世紀の初期に西ヨーロッパに到達した。祖国をもたない漂泊の民として知られ、固有の社会生活を営む中ですぐれた音楽や舞踊を生み出した。ジプシーの歴史は、迫害の連続であったが、今日でもそれぞれの母国によって保護、支持されることがなく、人権を無視されることが多いという。とくにそうした傾向は東ヨーロッパに著しいことが指摘されている。1990年６月には、全ヨーロッパ安全協力会議の第二回人権会議で少数民族の権利がとりあげられていたのに対してジプシーが権利を訴えたものである。

18世紀に現れたＪ．Ｇ．ヘルダー（1744～1803）は、『人類歴史哲学考』（1784～91）の著者として知られる。地球の歴史から始め、自然と人類の総合史の把握をめざした。彼は人類を包み、歴史を貫くものは神の摂理であるとの考えのもとに、あらゆる時代の風土を重視し、諸民族の役割に意義をあたえつつ人間史の起源を探ろうとした。ヘルダーの思想は後、わが国の和辻哲郎に受容され、『風土』や『倫理学』に影響を与えた。これより以前に出された『言語起源論』（1771）の中で、彼は言語を国民としての統一的自己理解の一部、統一民族国家形成に欠くべからざる器官であると論じ、国家にとり祖先から引き継いだ言語以上に、貴重なものはないとも述べている[35]。水津一朗はヘルダーの学説を考察した中で「近代国家の母胎となった民族領域は、同一言語の分布範囲とほぼ重なる場合が多い。しかし国土と、国語とのひろがりとの間にみられる不整合に端を発して、さまざまな民族問題が地表に暗いかげりを投じてきたことについても、みのがすことはできない」と述べている[36]。

それにつけても民族とは何か。ふたたびふりかえって考えてみることにする。前述したところでは民族を言語、宗教、伝承、歴史、生活習慣などの文化を共有し、それ自体が血縁的、地縁的共同体であるとする意識によって結ばれる集合単位をさすとしたが、これだけでは十分だと思われない。日本人にとって民族という概念は理解しにくいものの一つである。国内で生活する上では他と区分することはほとんどその必要がない。日本人はこの問題を考えるのは不得意で、苦手である。その背景には人種、民族、国民の三つの概念の混同があるように思われる。外観上、明らかな人種的徴表を前提としての区分はもっともわかりやすいにちがいない。そうしたものの考え方が先行するところからともすると混乱が起こる。民族とは基本的には精神的な面での文化を基準としての区分なのである。

人種的徴表に次いで他と区分しやすいのはやはり前述したように言語である。古代ギリシアではギリシア人以外の他の人間をバルバロイ（わけのわからない言葉をしゃべるもの）と呼んだし、ロシア語ではドイツ人のことをネーメツというが、これは聾唖者の意味である。彼らは他の人間の存在を接触によって知っていた。地方で用いていた母語を文語の水準に高めようとしたのはダンテ（1265～1321）であることはあまりにも有名である。イタリア語の原型であるトスカナ地方の方言をラテン語の地位に高めるにはどうすればよいかを述べたのが『俗語論』（1304～07）である。それぞれの国ではやがて文法書が編纂され、民族語として自立、認知されるようになった。フランス革命後、ナショナリズムを背景として近代国家が出現すると、それぞれの国家は国語（公用語）によって統一し、国語教育などによって他と区別して民族の国民化をはかった。国家が人為的に形成され、その枠の中で民族がつくり出されるとするならば民族は二次的な存在となる。民族は所詮、虚構であるという考えが生まれるゆえんである。

もともとオランダ語はドイツ語の方言であるといわれる。このことはDutchは、Deutcheと同意義であることによって明らかである。オランダの国語（公用語）はオランダ語、オランダ語を国語、公用語とするものがオランダ人ということになる。フランス、ドイツ、ベルギー三国にかこまれる人口38万の小国ルクセンブルグは、フランス語、ドイツ語を公用語としているが、近時現地の言語レッツェブルゲッシュ語をルクセンブルグ語としてこれをこの国の国語にしようとする動きがみられる。ルクセンブルグ語を用いる人々はルクセンブルグ人ということになるわけである。

第一次世界大戦後の民族自決の原則にもとづいて誕生した東ヨーロッパ諸国では第二次世界大戦後、主要民族の比率が高まりつつある。1930～39年と1960年の比較ではたとえばチェコスロバキア66％→93％、ルーマニア73％→86％、ポーランド（領域変更がある）69％→99％となっている。民族の純粋度が高まることはそれだけ民族の結合を高めることになり、民族の国民化が進められる。しかしそれは主要民族中心の発想であって少数民族に対してはたとえばブルガリアではもはやそれは存在しないという立場をとり、最近では民族調査を実施していないし、ユーゴスラビアでは民族の自己申告制度をとり、どの民族にも属していないと考えるものにはユーゴスラビア人の申告をさせている。マルクス・レーニン主義の初期の民族理論が国際的で世界語の確立をねらうものであったことの縮刷版と受けとめることができる。

一つの主権国家の中に複数の主要民族が含まれる場合は、たとえばチェコスロバキアではチェコとスロバキア両共和国の同格を前提としての協調がはかられている一方、ユーゴスラビアでは連邦制の危機を招いている。クロアチア語とセルビア語は、ラテン文字とキリル文字の別はあるが、同一言語である。民族区分のもっとも一般的な基準が言語であると述べてきたが、クロアチア人とセルビア人を分けるものは言語ではない。1991年５月以来のクロアチアとセルビア（連邦）との紛争の中でクロアチア人の女性が「セルビア人はけだもの、彼らの言うことは信用できない」（1991年９月６日朝日テレビ）とセルビア人を罵る言葉は憎悪以外の何物でもない。それ自体が血縁的、地縁的共同体であるとする意識は自他を区分し、他に対してある種の感情をもつことになる。また西ヨーロッパの人々はもちろん東ヨーロッパの人々も自らよくいうことは、これらの国では外圧を受けた時には一致協力して結束するが、国内が平和になると主義、主張が分立してまとまりを失うということである。しかしながら成熟した西ヨーロッパではヨーロッパ共同体（ＥＣ）を中心にして経済的にも政治的にも協調、統合の時代に入っている。新しい時代に対応して民族主義と協調主義とを今後、どのように調和させていくかが東ヨーロッパの大きな課題である。

Ⅶ まとめ

1989年から91年にかけて東ヨーロッパは大きく変化した。西ヨーロッパ文化圏のボーダーランドに位置する東ヨーロッパをとりあげて民族と国家の関係を考察した。本稿で東ヨーロッパの範域としたのは西ヨーロッパ文化圏と東スラブ（ロシア）文化圏、さらにイスラム（トルコ）文化圏が接触、交錯し、文化的、社会的、政治的、経済的にこれらの影響を受け合ってきた国家群の地帯である。この地帯は北はフィンランドから南はギリシアに至る範囲である。この地帯の地理的性格として、漸移性、不安定性、多様性があげられるが、漸移性と多様性が政治的に不安定性を招いている。この地帯には多くの少数民族がそれぞれの国家に属していて、政府はそれぞれ対民族対策を講じている。事例としてコソボ州のアルバニア人、トランシルバニア地方のマジャール人、スロバキア地方のマジャール人、ブルゲンランド地方のマジャール人、クロアチア人、ケルンテン地方のスロベニア人、ラウジッツ地方のソルブ人、東ヨーロッパ諸国のジプシーを挙げた。民族とは何か、定義づけはきわめて難しい。もっとも一般的なのは言語を基準とする区分であるが、さらに重要なのは、それ自体が血縁的、地縁的な運命共同体であるとする意識である。東ヨーロッパ諸国にとって今後もっとも大切なことは民族の自主性を相互に認め合いながら国内的にまた国際的にいかにこれらと協調していくかの理念を確立することである。

注

1 J.P.Cole and P.C.German, A Geography of the U.S.S.R.(1970)

2 和辻哲郎『風土—人間学的考察—』(1960)

3 P.ヴィーダル・ド・ラ・ブラーシュ；山口貞夫訳『人文地理学』(1933)

4 T.G.ジョーダン；山本正三・石井英也訳『ヨーロッパ文化—その形成と空間構造—』(1989)

5 比較言語の研究からインドヨーロッパ語系を二つに分ける。西方群の言語にはｋ音、東方群の言語にはｓ音が認められるところから西方群をケンタム系（ラテン語で100の意味）、東方群をサテム系（アウェスタ語で100の意味）と呼ぶ。

6 F.W.Carter,Dubrovnik (Ragusa) A Classic City-state.(1972)

7 J.アンセル；山本俊朗『スラブとゲルマン』(1975)

8 G.W.Hoffman, The Evolution of the Ethnographic Map of Yugoslavia: A Historical Geographic Interpretation, An Hisorical Geography of the Balkans.(1977)

9 5に同じ

10 C.S.Coon, The Race of Europe(1957)

11 I.アンドリッチ；松谷健二訳「ドリナの橋」『現代東欧文学全集12』(1945)

12 P.Deffontaines,ed. Larousse Encyclopedia of Geography.(1963)

13 J.Gottman. A Geography of Europe.(1962)

14 N.J.G.Pounds. Europe and the Soviet Union.(1966)

15 M.R.Shackleton,Europe: A Regional Geograpy(1966)

16 A.F.A.Mutton, Central Europe.(1961)

17 G.W.Hoffman, A Geography of Europe.(1969)

18 13に同じ

19 O.Halecki, The Borderlands of Western Civilization.(1952)

20 17に同じ

21 イヴァシュキェヴィッチ；木村彰一訳「ウトラタの水車小屋」『現代東欧文学全集8』(1936)
22 増田四郎『ヨーロッパとは何か』(1967)
23 長与進「スロヴァキア—諸民族のはざまで—」『東欧の民族と文化』(1989)
24 R.E.H.Mellor, Eastern Europe, A Geography of the Comecon Countries.(1975)
25 N.J.G.Pounds, Eastern Europe.(1969)
26 R.Pearson, National Minorities in Eastern Europe, 1848-1945.(1983)
27 A.Schöpflin, Natioal Minorities under Communism in Eastern Europe; K.London ed. Eastern Europe in Transition(1966)
28 J.Kolsti, Albanianism: From the Humanists to Hoxha. Z.A.ward, Minority Politics in the German Democratic Republic: Problematics of Socialist Legitimacy and National Autonomy. i.Völgyes, Legitimacy and Modemization: Natinality and Nationalism in Hungay and Transylvania; G.Klein and M.J.Reban ed. The Politics of Ethnicity in Eastern Europe.(1981)
29 『同盟及連合国ト墺地利国トノ平和条約並議定書及宣言書』第2編墺地利国の境界（第27条）
30 29に同じ
31 A.F.Burghardt, Borderland-A Historical and Geographical Study of Burgenland, Austria.-(1962)
32 ステーヴン・クリソルド編；田中一生、柴宜弘、高田敏明訳『ユーゴスラビア史』(1980)
33 住谷一彦「「種族」・「民族」・「国民」—ヨーロッパの事例に関するカズイスティーク—」川田順造・福井勝義編『民族とは何か』(1988)
34 28に同じ
35 J.G.ヘルダー；木村直司訳『言語起源論』(1971)
36 水津一朗、言語と地域—ヘルダー『言語起源論』200年記念によせて—（文化圏の歴史地理〈歴史地理学紀要15—1973〉）

Summary

The area in which Western civilization spread is occuppied mainly by Germans and Latins which religious beliefs that are Roman Catholic and Protestant. Slavs, Balts, Kelts, Illyrians, Greeks and Fino-Ugrians live outside this area. Finland, Estonia, Latvia, Lithuania, Poland, Czech-Slovak, Hungary, Slovenia and Croatia cover the Roman Catholic and Protestant religious regions. This area can be regarded as the borderlands of Western civilization. These countries are surrounded by Eastern Orthodox countries, including Greece, the Soviet republics, Bulgaria, Serbia, Montenegro, Makedonija and Romania, and the Islamic countries. From Finland to Greece, there is a tier of countries that borders the Germans and Latins on one side and Eastern Slavs and Islam on the other.

The characteristics of Eastern Europe are transition, instability and diversification. This is clearly expressed in the area's physical as well as its cultural-political characteristics. Is such an area, it is linguistics that properly distinguishes one people or ethnic group from another.Most importantly, ethnic groups are held together by linguistics, religion, history, legends and customs etc. Furthermore, they are united according to the degree to which they are conscious of their blood relationships and sense of territorial community.